

「巻頭特集」伝統的工芸品「伊賀くみひも」

絹糸が織りなす伝統の美を未来へつなぐ

組紐の技術は奈良時代に大陸から伝わったといわれ、仏具、武具、装身具など、時代によって用途が変化していった。伊賀では1世紀ほど前に産業として根付き、帯締めや羽織紐の特産地として発展してきたが、近年は厳しい状況下にある。



「組匠の里」では組紐の切売もしている。シンプルな組み方の紐が多いが、色が多彩で、少量でも購入できると人気



丸台は、数多くの組み方ができる万能の台。使える玉数に限界があるため、柄の種類は少ないものの組目の美しさが持ち味

明治時代中期から産業として発展

「伊賀くみひも」は、江戸に残っていた組紐の技術を習得した初代廣澤徳三郎が、明治35年に故郷の上野上林で開業したのを始まりとする。当時、欧化政策の熱が冷め、和服が見直されていた。また、明治40年頃には女性の間で組紐の帯締めが人気を博し、以来、帯締めや羽織紐に組紐が使われるようになっていく。そんな社会背景も手伝って、組紐の需要は高まるばかりだった。組紐を組む「組子」の大半は農家の女性たち。主な産業がなかった伊賀において、手内職の工賃が格段に高い

外国製品の流入と和装需要の低下

昭和45年頃に韓国製組紐、昭和55年頃に中国製組紐が進出してきた。さらに、昭和50年代は洋装ライフスタイルが急速に一般化した時代で、着物離れが顕著となった。これらの影響により、製品の供給過剰、工賃の低下を招き、組子の数は減少の一途をたどった。平成に入ってから、長引く日本経済の低迷が、需要低下に拍車をかける。

組紐は、たちまちのうちに広がり、定着していった。最盛期、組子は3千人を超え、組紐を作る「高台」は嫁入り道具のひとつに数えられたという。昭和24年には三重県組紐協同組合(組合員数88人)が結成され、地場産業としての基盤が整えられた。それまでの手組みに加え、機械組みの導入も進み、やがて伊賀は国内最大の和装組紐の生産地へと成長を遂げる。昭和51年12月15日、国の伝統的工芸品に指定された。



古くから組まれてきた、伊賀くみひもの帯締め

三重県組紐協同組合理事長 山口明彦さん

多様で優美な「組み」と配色の「美」が魅力の伊賀くみひも



組紐体験の様子。組匠の里では8玉の丸台を使って金剛組で、キーホルダーまたはプレスレットを作ることができる。インストラクター(写真右)が丁寧に指導してくれるので、小学生でも楽しめる



「東日本大震災も大きな痛手となりました。東北地方は着物の消費地で、組紐にとっては大きな商圏のひとつでしたから」と三重県組紐協同組合理事長の山口明彦さんは話す。組合員数は設立当初の3分の1にまで減ってしまい、組合青年部もここ数年は活動を休止している。組子の減少に伴って高齢化が課題となり、新規の組子確保も難しい状況が続く。組紐の製造工程に欠かせない染色、糸練りを担う外注業者も激減した。「唯一残っていた、丸台を作る業者がどうとう閉めてしまいました。組紐の製造に直接関わる者だけでなく、組台や糸玉などの道具を製作する職

人さんも減っています。伊賀くみひもを継承していくうえで、取り組むべき課題は少なくありません」と山口理事長。

周知の拡大に努め後継者確保を図る

各組紐店も手をこまねいていたわけではない。従来の帯締めや羽織紐以外に、ネクタイやバッグ、アクセサリなどの新商品を開発して、新規需要の開拓に取り組んできた。なかでもストラップは、組紐ならではの鮮やかな色使いが評判を呼んで流行した。最近の注目は刀の飾り紐だ。ゲーム「刀剣乱舞」の人気にあやかって、商品をそろえた。

組の体験講座を開いている。子どもたちに伝統産業である組紐に関心を持ってもらい、後継者確保に繋がればとの期待を込める。「このところ組合員の店のなか



組台は丸台、角台、高台、鏡竹台の4種類が一般的で、組紐の種類(丸組紐、角組紐、平組紐)や柄に応じて使い分ける。1鏡竹台は機械織りのように、上下の糸の間に緯糸を入れてヘラで打ちながら組む台である。2比較的球数の少ない紐を組むのに使われる角台。組まれた紐が下へ下へ対して、角台では上に組み上がる。3主流となる高台は畳半分ほどの大きさの組台。竹型のヘラで打ち込んで、目を整えながら組んでいく。複雑な柄出しができるのが特徴だ

移住者夫婦が組紐職人へ

高橋健作さん 由加里さん夫婦



昨年、静岡県浜松市から移住してきた高橋健作さん・由加里さん夫婦。「移住コンシェルジュの方や地域の方々など、みなさんとても親切に対応してくださり、そんな人の温かさが、伊賀への移住の決め手となりました」と振り返る。

健作さんの就職先は、伊賀くみひも製造の糸伍株式会社。製紐機、トーション、綾竹という3種の機械組み設備を有しており、健作さんは綾竹を担当している。

「組紐は知っていたものの、実際に機械から組み上がった製品の美しさに感動しました。まだまだ覚えることばかりですが、しっかり技術を身につけていきたいです」

一方、由加里さんは伊賀くみひも3代目廣澤徳三郎さんに弟子入りした。ふたりとも古いもの、伝統あるものに興味があったそうで、機械組み、手組みの違いはあるが、奇しくも夫婦で組紐に携わることになった。

「同業他社ですので、仕事の話はしないようにしています。ただ、帰宅すると妻が組紐を組む音が聞こえてきて、それがなんか心地良く、子どもをこんな音がするなかで育ていきたいな、と最近思うようになりました。変に構えず、わずかながらも伝統役立てるよう、頑張っています」



綾竹を操作する高橋健作さん

また、伊賀市内の全小学3年生を対象に、夏休みと冬休みの2回、組

伊賀伝統伝承館 伊賀くみひも 組匠の里

伊賀市上野丸之内116-2 TEL 0595-23-8038

- 開館時間/9:00~17:00
- 休館日/毎週月曜日(祝祭日の場合は開館)
- 入館料/無料
- 組紐体験料/1,100円(税込み)。団体(1回50人まで)の場合は要予約。個人(6人まで)は随時受付

